

## 平成24年度成果報告書

### 1. 業務の題目

基礎調査「新しい科学コミュニケーションの探索」

### 2. 担当フェロー

佐倉 統

内田 麻理香（アソシエイトフェロー）

### 3. 当該年度における成果

当研究では、今までの科学コミュニケーションでは十分対象とすることができなかつた層への浸透をはかるため、概念の整理と枠組みの再検討をおこない、科学知と社会知の接する領域における活動を、新たな科学コミュニケーションの様態として位置づけ直し、これからの科学コミュニケーションのあり方を提示することを目標とする。

#### ①科学コミュニケーションの概念整理と枠組みの展望

##### a. 科学コミュニケーションセンター・フェローらへのインタビュー実施

以下の通り、フェローと北原主監への計6名インタビューをおこなった（渡辺フェローは平成25年度初頭に実施予定）。「サイエンスチャンネル」での映像公開も予定しているため、同時に動画も収録した。

- ・北原主監
- ・平川フェロー
- ・三上フェロー
- ・八木フェロー
- ・小泉フェロー
- ・星フェロー

##### b. 日本の科学コミュニケーションの現状見取り図の作成準備

インタビューを実施した結果、各々の「科学コミュニケーション」概念の多様性が明らかになった。その多様性は当初の予想以上であり、多様さの質も事前の想定と異なっていた。インタビュー前は、各人の科学に対する立ち位置としての「内側⇄外側」という軸から生まれる多様性を念頭に置いていた。その予想は半分正しかつたが、それとは別に、「具体的な課題に注目するか⇄大きな枠組み（メタ）に注目するか」という軸を見出した。この2つの軸で、科学コミュニケーションの活動と人の有効なマッピングができるものと考えている。後者の軸は、M. ギボンズの「モード2⇄モード1」の概念を元に立てることができると思われるので、今後引き続き検討していく。

#### ②新しい科学コミュニケーションの具体的なトピックの探索と調査

##### a. これまで「科学コミュニケーション」と注目されていなかった具体的な活動のピックアップ

現在は「科学コミュニケーション」とは捉えられていないが、科学と異分野との融合に成功している具体的活動を探り、インタビュー候補者をピックアップし、インタビューの打診を進めてきた。現段階での候補者は以下の通りである。

- ・科学×アート（青森県立美術館 学芸員 工藤健志氏）
- ・科学×料理（味の素（株） 研究員 川崎寛也氏、京都大学 教授 伏木亨氏）
- ・科学×ファッション（筑波大学 准教授 三谷純氏）
- ・科学×映像作品（東京芸術大学 教授 佐藤雅彦氏、ユーフラテス）

なお、インタビュー打診の段階や、テレビ制作会社のディレクターからのアドバイス聴取から、料理の分野へのアプローチへの難しさがわかつた。料理人は、明確に科学を利用している者であつ

ても（例えば、分子ガストロノミーと呼ばれる先鋭的な料理）、明確でない形で経験知として科学の知識・体系を利用している者も、自らの料理・作品に「科学」という用語を当てはめられるのを嫌う傾向が伺える。料理以外の他分野のクリエイターに対しても、「科学」と結びつけてアプローチすることにより、同様な壁にぶつかることが予想できるため、その点を留意して進めていく。

また、科学以外の分野のクリエイターが「科学」という言葉を忌避するように見えること自体が、本ユニットの研究トピックとして成り立つ可能性もあるので、この方向も検討していく。

#### b. 「科学×アート」の事例インタビューの実施

「Art and Air～空と飛行機をめぐる、芸術と科学の物語」の企画展のキュレーションをした、青森県立美術館学芸員、工藤健志氏にインタビューをした。

工藤氏からのインタビューより、科学と異分野を融合させた科学コミュニケーションが成功するためには

- ・ 「異分野」の方でも高く評価される活動／作品であること
- ・ 「科学」という看板に寄りかかったり、甘えない姿勢
- ・ 科学側からの視点の科学コミュニケーションではなく、別分野側から見た科学コミュニケーションの必要性

などが重要であるとわかり、科学コミュニケーション活動への示唆を得た。